

## 十字架に結ばれた家族

イースターをいよいよ来週に控え、私たちは今日、イエス様のエルサレム入城を記念する棕櫚の主日を迎えています。今からおよそ2000年前の今日、イエス様はエルサレムに入り、十字架、そして復活へと続いていく地上での最後の一週間を過ごされました。私たちはこれからイエス様の歩まれたこの一週間を辿りながら、その受難に思いを馳せていく「受難週」を過ごしていきます。

この「受難週」はレントのクライマックスとも言うべき大切な期間で、以前にも申し上げたことがあったかもしれませんが、実はこの一週間のそれぞれの日に名前がついています。月曜日は「宮清めの日」、火曜日は「教えと論争の日」、水曜日は一人の女性が石膏の壺を割って香油をイエス様に注ぎかけたことを記念する「ベタニアの日（香油の日）」、木曜日は「洗足木曜日」、金曜日は「受難日」、土曜日は「暗黒の土曜日」です。カトリックやオーソドックス・チャーチ、聖公会などでは、このそれぞれの日に様々な行事が行われているようです。私たちプロテスタント教会では、これらの教会のように毎日行事を行うという事はあまりしていませんが、それでも「洗足木曜日」や金曜日の「受難日」に夕礼拝を守っている教会はたくさんあると思います。

今年は東京府中教会でも、4/7(金)の午後7時より受難日の夕礼拝を執り行うことになっております。ぜひともご都合つく方は足を運んでくださって、イエス様の十字架を偲ぶ一時を御一緒していただければと願っています。今日より始まりますこのレントの最後の一週間、一日一日を大切にしながら、悔い改めのうちに良きイースターの備えの時を過ごしていきましょう。

さて、今年のレントは4つの福音書に記されている十字架の場面を一つひとつ見てきました。マルコから始まり、マタイ、ルカの十字架の場面は既に取り上げましたが、今日と4月7日の受難日は残りのヨハネの十字架の場面を取り上げます。というわけで、今日はヨハネによる福音書の19:17～27をお読みいただきました。そこにはどん

なことが書かれてあったのでしょうか。一つひとつ見ていきましょう。

共観福音書と呼ばれるマタイ、マルコ、ルカの3つの福音書では、イエス様は御自分で十字架を担いで行く力もなくて、代わりにキレネ人シモンが十字架を背負って行くというお話になっています。これによって、これだけ弱られるほどの御受難を、イエス様はその身に負われたのだということがアピールされています。しかし、今日お読みいただいたヨハネによる福音書では、イエス様は「自ら十字架を背負い、いわゆる『されこうべの場所』、すなわちヘブライ語でゴルゴタという所へ向かわれた」と記されています。このようにヨハネによる福音書では、処刑場のゴルゴタまで最後まで十字架を自分で背負っていくイエス様の姿を描くことによって、積極的に御受難に立ち向かっていく、そして神様の御心である救いを成し遂げていく英雄としてイエス様を描いているのでしょう。

ヨハネに描かれているこうしたイエス様の姿は、かつてアブラハムの息子イサクが全焼のいけにえの薪を背負ってモリヤの山へ歩いて行った姿を思い起こさせます。創世記22:1～19に記されているお話ですが、アブラハムは自分の独り子である息子すら、惜しまずいけにえとして神様に捧げようとしてしました。しかし、アブラハムを愛する神様はこれをお止めになったのです。しかし、神様は御自分では、御自分の愛する独り子イエス・キリストをすら惜しまずに、実際にいけにえとして十字架の上にお捧げになりました。それは、ただ私たちに対する愛のゆえに他なりません。私たちへの愛のためには大きな犠牲を払うこともお厭いにならない神様の愛を、私たちはいつも忘れずにいたいと思います。

さて、イエス様は他の二人の犯罪人と一緒に十字架につけられました。それは他のすべての福音書にも記されています。ヨハネに特徴的なのは、イエス様の十字架の罪状書きを巡って、ピラトとユダヤ人たちとの間でやり取りがあったことを記していることです。

十字架刑ではその人が処刑されるに至った罪状を書いて、それを犯罪人の頭上高く十字架の上に掲げるのが慣例でした。そこでピラトは、イエス様がつけられた十字架の上に、「ナザレのイエス、ユダヤ人の王」と書いた罪状書きを掲げたのです。すなわち、「ナザレのイエス」は、パレスチナで「ユダヤ人の王」を自称してローマ帝国に反乱を企てた、その罪状により処刑されるのだということです。

この罪状書きが、「ヘブライ語、ラテン語、ギリシア語で書かれていた」ことは、ヨハネによる福音書だけが記しています。このように、ユダヤ人にも、ローマ人にも、ギリシア人にも理解される言語で罪状書きが書かれていたという事実は、イエス様の十字架の救いが全世界に及ぶべきことを示唆していると言われています。

しかし、ピラトが書いたこの罪状書きにユダヤ人の祭司長たちは不満を感じ、変更を要請しました。ピラトが書いた「ナザレのイエス、ユダヤ人の王」という罪状書きでは、まるで彼らがイエス様を自分たちの王として認めていたかのように思われてしまうからでしょう。しかし、人々に押され、流されて、仕方なくイエス様を十字架につけることになったピラトが、この時ばかりは頑として譲らず、「わたしが書いたものは、書いたままにしておけ」と言い張ったことをヨハネは記します。そこには、自分を煩わせ、こんな手間を取らせたユダヤ人たちに対する腹いせの気持ちがあったことでしょう。

さて、イエス様の十字架のもとに幾人かの女性が立っていたということは、それぞれ人物が異なるにしても、マタイ、マルコ、ルカの共観福音書も報じています。ヨハネの特色は、イエス様の母マリアがその中に混じっていることであり、さらにはイエス様の「愛する弟子」が登場することです。そして、この二人は「婦人よ、御覧なさい。あなたの子です」、「見なさい。あなたの母です」というイエス様の言葉で家族として結ばれるのです。こうした記述は、十字架のもとで血縁関係を越えた新たな家族としての交わりが生み出されることを示唆しているのではないのでしょうか。

ここから、私たちはイエス様の十字架の贖いについてより深い理解が与えられます。ここで皆さんにお聞きしますが、そもそも贖いというのは何でしょう。イエス様が、本当はこの私が受けなければならない神様の裁きを代わりに引き受けてくださった。これにより、私の罪が赦された。神様と仲直りできて、私の死が滅ぼされて、永遠の命が与えられた。それが、キリスト教の言う贖いです。それは間違いありません。でも、先程のヨハネの十字架の場面が示唆していたように、贖いというのはそれだけではないのです。もしそれだけなら、イエス様の贖いは私とイエス様、私と神様だけの縦の関係だけに終始していたことでしょう。しかし、贖いというのはもっと奥深く、もっと恵み深いものです。イエス様の十字架、その贖いは私たちの間に横のつながり、すなわち血縁関係をも超えた新たな家族の交わりをも造り出すのです。

いつだったか『こころの友』に、民族紛争の傷跡を乗り越えて和解を成し遂げたある民族と民族とのお話が載っていました。なぜそのような憎しみを乗り越えて和解を成し遂げることができたのかという問いかけに、ある人がこう答えたそうです。「私も神様に赦されたのだから、同じ神様に赦された相手を私も赦そうと思ったのだ」と。私たちは時に人間同士がなぜこうも憎み合わねばならないのか思うような争いをすることがあります。しかし、人類相互のこうした憎悪がこのように真の家族愛へと変えられていく。そして平和が、家族の交わりが生み出されていく。これが贖いの力です。

もっと身近なところで言えば、教会に集う私たち一人ひとりもイエス様の贖いによって結ばれ、家族とされた者同士と言えるでしょう。皆が皆、神様に赦していただいた存在ですから、私たちの交わりの中心にはいつも赦しがなければなりません。分裂というのは、いつも私たちが赦された者であるということを忘れて裁き合うところから始まっていくのです。「なぜこんなことをするの?」、「なぜこうしてくれないの?」と相手に正しさを求め、それが満たされない時に私たちは不満をぶつけてはいないでしょうか。

今は亡くなられたノートルダム清心学園元理事長の渡辺和子さんは、一頃ブームに

なった『置かれた場所で咲きなさい』という著書の中で、「どれほど相手を信頼していても、『100%信頼しちゃだめよ、98%にきなさい。あとの2%は相手が間違っただけの許しのために取っておきなさい』と語っておられます。以下、渡辺和子さんの言葉です。「人間は不完全なものです。それなのに100%信頼するから、許せなくなる。100%信頼した出会いはかえって壊れやすいと思います。『あなたは私を信頼してくれているけれども、私は神さまじゃないから間違える余地があることを忘れないでね』ということと、『私もあなたをほかの人よりもずっと信頼するけど、あなたは神さまじゃないと私は知っているから、間違ってもいいのよ』ということ……。そういう『ゆとり』が、その2%にあるような気がします。」間違えることを許すという「ゆとり」。それは本当の家族の間でも、お友達の間でも、教会という家族の間でもとても大事なことでないでしょうか。

今日から新年度の歩みが始まっていますが、これからも十字架で結ばれた家族として、互いに赦し合い、それでも支え合いながら、皆で同じ方向を向いて歩んでいきましょう。その真ん中に、イエス様はいつも私たちと共にいてくださいます。

祈りましょう。 ——以下、祈祷——